

吟剣詩苑

g i n k e n s h i b u

日本財団助成事業
高松宮妃癌研究基金奉賛

第53回全国吟剣詩舞道大会
師走の千葉に高らかに響く
吟剣詩舞道讃歌

アジア・フィランソロピー会議2023

剣詩舞スパーチーム、
アジアの中の日本を発信

表紙の詩

西南の役陣中の作 佐々友房

雨は戦袍を撲ち風沙を捲く

江山十里両三家

壮凶一蹶窮り無きの恨み

馬を断橋に立てて落花を看る

2

令和6年
睦月



聖風流・愛知

あさだ せいけん
浅田聖謙
少壮吟士

年を経た二人が酒を酌み交わす詩。お正月なのであまり暗くならないよう、言葉の読み方や節調に気を遣いました。承句の「相逢い相値うて」は「あい」という言葉が続きます。きちんと意味が伝わるよう表現を工夫して吟じてみました。



煌成流・東京

はやしこうさい
林煌彩
少壮吟士

杜甫の代表作です。美しい風景を軽やかに、かつ言葉が弱くならないよう、後半は悲しみや無念さなど作者の心情を伝えられるよう詠いました。初めての新春吟詠ラジオ収録にお呼びいただき大変光栄でした。



春洋流・東京

いしかわしんかい
石川春海
少壮吟士

ラジオでいただいた初めての和歌は、春の到来を詠った一首。自然の有り様を表現した情景詩的なところもありますが、春を迎える喜び、しかも厳しい冬を乗り越えてきたからこそ感じる喜びがあるので、はと考えて詠ってみました。



紫虹流・神奈川

ほしの しんせい
星野紫栄
少壮吟士

今回、吟詠時間を絶句で1分50秒以内とされていて、合わせるのに少々戸惑いました。壮麗な景色の中から梅の花に春を見つけるとい情景詩。ゆったりと景色を味わう雰囲気を出したいと詠いましたが、うまいきましたかどうか。



岳精流日本吟院・東京

つつみりゅうび
堤龍美
少壮吟士

春の情景詩ですが、陽が落ちて霧雨の中から晩鐘が聞こえるというもの。明るく強すぎはいけません。ただお正月なのでどこか華やかな雰囲気も出したい。しっとり柔らかな中にも芯のある吟を目指しましたか。どうなりましたか。



朝翠流・東京

おおやまそうほう
大山宗鵬
少壮吟士

戦国の武田信玄というイメージとは違う、人間くさい意外な詩。寒くて億劫な中、渋谷詩作に向かうところなど親近感を覚えつつ詠いました。春風に笑われるのが気恥ずかしいという感覚は、修行不足の私にはまだわかりませんが。



契秀流・神奈川

かとうけいび
加藤契毘
少壮吟士

得意とはいえない和歌ですがお勉強の機会と考え取り組みました。若くて非業の死を遂げた作者。梅の良さは桜に先駆けてこそという歌は人生に重なります。今回はしっかり言葉を立たせるべき和歌ではないかと考え吟じました。



神道流吟詠会・福島

いしかわこんおう
石川渾凰
少壮吟士

コンクールの吟題にもなる詩ながら、公の場で詠うのは初めて。言葉が短く、緩急の必要な五言絶句には苦手意識がありましたが、良い勉強の機会となりました。難しい「あ」行の発声も多く、意識して練習を重ね本番に臨みました。



北辰神明流・愛知

あんだうせいふう
安藤聖鳳
少壮吟士

静かな春の訪れの詩。雪解けのみずみずしい風景を思い浮かべながら吟じました。2年ぶりの新春吟詠番組で、いつもと違う広いスタジオで聴く素晴らしい尺八と箏の音。心にピリピリ響く収録となりました。有り難うございました。



寿岳流・長野

しおざわそうほう
塩澤宗鳳
少壮吟士

和歌は日本語の柔らかさが魅力ですが、詩吟でそれをどう表現するか、私の目下の課題です。序詠で言葉を伝え、本詠で詩情をという基本に沿い、富士を見渡す空間の広がりを表そうと詠いました。良い勉強をさせていただきました。



吟詠アカデミーガクヨウ・栃木

つちざわびがく
土澤美岳
少壮吟士

馴染みのなかった吟題ですが、今回取り組んで素敵な詩だなと感じました。梅と雪と詩がなければ十分な春ではないと理屈をこねているのがユーモラス。春を迎える詩ですので、後半は明るい気持ちで伝えるよう詠ってみました。



日本修道流・千葉

ういしゅうこう
宇井修光
少壮吟士

桜は日本人の心の拠り所。下句の「山ざくら花」を強調して詠ってみました。先輩方の過去の和歌を聴くとすぐ個性のある吟もあり素敵に思います。まだまだ基礎固めの段階ですがいつかは自分なりの表現をしてみたいですね。

1月2日(火)放送

〔吟題〕和歌・田子の浦ゆ(山部赤人)

1月3日(水)放送

〔吟題〕和歌・敷島の(本居宣長)

凍てつく年明けに 春を探す吟声響く

NHK FMラジオの吟詠番組は例年と同じく「新春吟詠」として、令和6年正月2日・3日の二日間連続で放送されました。番組収録が行われたのは令和5年12月5日。東京・渋谷のNHK505スタジオには、東日本中部の少壮吟士12人が集結。吟題はそれぞれ初春にちなんだ12の詩歌。華麗な詠い初めが繰り広げられました。〔伴奏〕箏／石垣清美先生 尺八／高橋慧山先生





〔吟題〕
和歌・晴れてよし(山岡鉄舟)
淡窓伝光霊流・宮崎
八代光晃少壮吟士
令和6年の新春吟詠番組、年明け最初の舞台は八代光晃少壮吟士会会長が務めます。すつきりし

た青空に細かい花をちりばめたような背景にたつて吟ずるのは、江戸無血開城の立役者として幕末の三舟に数えられ、維新後の明治においても請われて要職を歴任した山岡鉄舟の和歌「晴れてよし」。
晴れてよく見える日だけでなく、よく見えない曇りの日にも、変わることなく美しく気高くそびえ立つてそこにある富士山。ちよつとしたことで変わる周囲の評価に惑わされない、武士道につながる精神性をうたっています。
「富士の山が出てくるので、お目出たい和歌なのだろうと思いきや、山岡鉄舟が悟りの境地に達した際に詠んだ一首。外見にとらわれず内面的な心が大事ということを踏まえ、私のモットーであります一言一句を丁寧に朗詠しようと収録に臨みました。ところがスタジオでスタッフの方の本番までの秒読みが始まりますと途端に胸が高鳴ります。結局、思いの半分も朗詠できなかったというのが正直なところ。僅か2分、されど2分の至難の業と、改めて感じ入った次第。でも、年頭に相応しく、私自身もこうありたいと思わせる演題を生伴奏で朗詠でき光栄でした」



〔吟題〕
問梅閣(高啓)
吟道藤星流・宮崎
中武玲星少壮吟士
続く二幕目は青地に八重咲きの梅をイメージさせる斑紋が柔らかな

く浮かぶ舞台背景。やはり華やかな梅花柄の着物をまとった中武玲星少壮吟士が詠うのは、明代初期の詩人高啓の五言絶句「問梅閣」です。
春に尋ねる。春はいつたどこから来て、いまだどこにあるのだろうか。月は西の空にかくれ、梅の花は何もいわない。問梅閣ではただ小鳥だけがかすかにさえずるのみ。
柔らく響きわたる吟声により、まだ冬のたたずまいを残す様に、かすかながら確かに到来している春の情景が立ち上がります。
「素朴な問いから始まる詩ですが、後半には中天高くではなく、低いところから梅の枝越しに光を投げかける月や、かすかに鳴く鳥が詠われ、耽美な雰囲気漂います。ただ、お正月の番組ですから、春を探し求めるしつとりとした情景を表現しながらも、どこか華やいだ感じが出せればと吟じました。私事ながらこの3月に少壮吟士を卒業させていただきま。少壮としてのフィナーレに、お正月のテレビの舞台で、こんな素晴らしい吟題をいただき、良い経験させてもらいました。本当に有り難うございました」



めでたき年の初めを賀す吟と舞

〔伴奏〕箏／石垣清美先生 十七絃／柿木原こう先生 尺八／高橋慧山先生
昨年の11月28日、NHK101スタジオにて令和6年1月1日放映のNHKEテレの吟詠放送番組の収録が行われました。「新春吟詠・新年を寿ぐ」と題された今年の新春吟詠には、正月を祝い春の到来を慶ぶ4題が選ばれました。出演者は西日本在住の7名。華やかで、かつ年始らしく気持ちも改まる凜とした舞台を披露しました。番組解説者で本誌「漢詩を紐解く！」連載でお馴染みの鷺野正明先生による詩心解説とともにどうぞ。



詩歌を分かりやすく解説して下さるのは……
鷺野正明先生
国士舘大学名誉教授

放送時の解説は一曲につきおよそ30秒。解説は耳で聞くだけなので、詩歌の内容・見どころは「聞いてわかる」よう簡潔さを旨としています。
今年最初の演目の作者は幕臣から維新後政治家となつた山岡鉄舟。「誠」を尽くし気高く生きることを目指していました。放送でいきなり「誠」を説いてもわかりづらいので省きましたが、本来はそこを理解して味わいたいところ。
二題目は、春がどこから来て今どこにあるのかと尋ねても月も梅

も答えてくれない、鳥が鳴いている、というだけの内容。しかし、この月が照り梅が咲き鳥が鳴くことが、まさしく春の情景で、春がいまここにあるよと、鳥はそつと鳴いて教えてくれます。情景を思い浮かべながら聴きたい詩です。
三題目はおめでたいことを詠う詩で、おめでたい言葉をかかへ多く詠いこむかが見どころ。「松竹梅」「蓬莱山」「鶴亀」が用いられています。亀が遊び鶴が舞うというのは、優雅な舞が舞われ人々が悠然と遊んでいることの表現です。

最後の詩は藤原茂範が邸宅に桜を植えた故事、平忠盛の「行きくれてこの下蔭を宿とせば花や今宵のあるじならまし」、源義家の「吹く風を勿来の関と思へども道もせに散る山桜花」、詠み人知らずの「さざなみや志賀の都はあれにしを昔ながらの山桜かな」、伊勢大輔の「いにしへの奈良の都の八重桜けふ九重にほひぬるかな」という和歌を取り入れた意欲作。和歌との関連を解説したいところですが、放送では「和歌を巧みに取り入れている」と言うにとどめました。

〔吟題〕
松竹梅（松口月城）

吟道清流・熊本（吟）

向山侑珠（少壮吟士）

菊水流劍詩舞道・岡山（舞）

藤上翔山（宗家）

向山侑珠少壮吟士と菊水流劍詩舞道の藤上翔山宗家のコラボレーションとなった三幕目の演題は、松口月城の七言絶句『松竹梅』です。歳寒の三友として慶事に用いられる「松竹梅」はもとより、長命で幸いの多い様をいう「寿福」、他にも「蓬莱」「鶴亀」「玉杯」と、これでもかと縁起の良いめでたい言葉を盛り込んだ祝宴吟の定番です。「テレビ収録は5、6年ぶりということもあり、緊張感を抑えるのに苦労していたところ、藤上先生と一緒にできて心強かったです。皆さん



ご存じのお正月らしい詩で、私も身体の中には入っている吟題です。『新年おめでとうございます』の気持ちを込めて吟じました」（向山）

「あらかじめ向山先生の吟の素録音データをいただいて、準備しました。『松竹梅』は流派にお弟子さん用の振付があり、これに正月番組に相応しいアレンジを加え舞いました。NHKテレビへの出演は実は初めてです。スタジオのセットや照明など、プロフェッショナルの仕事に圧倒され、緊張の中でも感動させられた一日となりました」（藤上）



〔吟題〕
桜花の詞（作者不詳）

詩吟道日本吟声流・熊本

山中梅鈴子（少壮吟士）

北辰神明流・愛知

野嶋帆楓（少壮吟士）

秀鳳流・高知

野中秀宗（少壮吟士）



新春吟詠の掉尾を飾るのは少壮吟士3名の連吟で詠う『桜花の詞』。吟題は、桜の花にまつわる故事や和歌を巧みに織り込んで詠った作者不詳の律詩です。

まず初句を全員で入り、二句を山中梅鈴子少壮吟士、続く三・四句の対句を野嶋帆楓少壮吟士、五六句

を野中秀宗少壮吟士、七句は再び山中少壮吟士のソロ、八句を全員で吟じました。

「この吟題は、少壮になりたての頃に吟じたことがあり、なじみ深い律詩です。同じ伴奏で吹き込んだ二人の吟に、私の吟を合わせて時間内に納めるよう編集したデータをもとにそれぞれ稽古に励みました。実際に合わせるのは本番前の2、3回でしたが、なんとかチームワークのよさで乗り切れた印象です」（山中）

「私が担当した三・四句は、桜の花の華やかさではなく、哀愁や恨みなどマイナスの感情が入ったパート。それだけに、個人的には好きな箇所なのですが、あまり前に出ないよう抑え気味に吟じました。連吟は一人で詠うときと違い、バトンをつなぐようにみんなで合わせることで達成できる、奥深い喜びがありますね」（野嶋）

「受け持たせていただきました五句目の『滋賀の浦は荒れて〜』は、特にアクセントや発音の難しい言葉が並び、どうすれば自然に聞こえるか苦心しました。今回の連吟ではお二人とも優美でしかも強くしつかりとした発声を持っていらつしやつて、そこに加わらせていただく形。本当に有り難く、よい勉強をさせていただきましたと思います」（野中）